

江戸の坂道散策

狸穴坂 (港区)



山野 勝 Yamano Masaru

坂道研究家

1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務めた。この十数年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役。『タモリのTOKYO 坂道美学入門』（講談社）に企画参加。著書に『江戸の坂——東京・歴史散歩ガイド』（朝日新聞出版）がある。

港

区の麻布台二丁目1と麻布台三丁目5の間、ロシア大使館の西脇から麻布狸穴町へ下る急坂がある。江戸の人々の大きな関心を集めた「狸穴坂」である。東側には高い石垣が続く、西側は谷底に向かう崖地になっている。やや湾曲しながら、雄大に下る長坂だ。特に、坂下からの眺めが素晴らしい。西側に建つ古い木造2階建ての住居を視野に入れ、坂上への道筋をとらえると、江戸の風趣が湧き起こり、一幅の画のように映るのだ。

坂名の由来には諸説ある。

①昔、坂下の谷間に古狸が棲んでいた、そのほら穴があった。マミとはアナグマの異称だが、よく混同されてタヌキのことといった。マミのアナでマミアナという地名が生まれ「狸穴」の字があてられたという。

②この坂に妖怪が出たが、それを魔鮓^{まみ}といい、やがて狸穴に変化したという。

③坂下に鉾石を採掘する坑道があり、それを間歩^{まぶ}といった。それが転化して狸穴になったという。享保6年（1721）、黄金のような雲母の砂が出たという記録もある。

三丁目坂 一服茶屋

狸穴坂の西側、麻布永坂町1と麻布台三丁目4の間に「植木坂」という坂がある。江戸時代、この近くに植木屋が多く住んでいたのが坂名の由来。菊花で飾る菊人形は、巣鴨染井や千駄木団子坂が有名だが、実はここが菊人形の発祥の地だったのだ。

植木坂の近くには明治の文豪・島崎藤村が住んでいた。大作『夜明け前』はここで執筆された。「メゾン飯倉」の前に石碑がある。

また、狸穴坂にはこんな伝説もある。

坂下に狸蕎麦^{さば}（作兵衛蕎麦）と称される蕎麦屋があった。昔、狸穴の古狸が江戸城大奥を荒し廻っていたのだが、内田正九郎という武士に成敗されて死んだ。これを哀れに思った作兵衛が、古狸の霊を屋敷内に祀った。それから人々はこの店を狸蕎麦と呼び、大いに繁昌したという。この界限が、江戸時代には鄙びた地域だったことが偲ばれる。



狸穴坂の西にある植木坂。

狸穴坂アクセス ▶ 地下鉄日比谷線・大江戸線の六本木駅を出て、外苑東通りを飯倉方面に進む。飯倉片町の信号から3本目を右折する。徒歩約15分。